４．牛白血病清浄化への取り組み事例（第２報）

宇佐家畜保健衛生所・[1] 大分家畜保健衛生所
〇榎園秀平・山岡達也・羽田野昭・吉田周司・病鑑　中出圭祐[1]

【はじめに】

近年、牛白血病は、全国的に増加傾向にあり、大分県内の農業共済牛白血病の死廃頭数は、最近10年間で年間平均180頭と高い水準で推移している。平成27年5月1日から、と畜場一般出荷での牛白血病による全部廃棄に対する共済金支払いが認められたものの、依然としてその経済的損失は大きい。

平成25年度、羽田野らにより、牛白血病ウイルス(BLV)抗体陽性牛が多く見られた農場Aについて清浄化対策への取り組みを発表したが、今回その後の状況をとりまとめたので報告する。

【これまでの取り組み】

平成25年7月、農場Aにおいて繁殖雌牛106頭のBLV抗体検査及びリアルタイムPCRによる遺伝子検査（以下、BLV検査）を行い、同年10月には、4～10ヶ月齢の子牛19頭についても同様の検査を行った。その検査結果をもとに農場と協議、BLV検査陰性の繁殖雌牛・子牛を隔離飼育（陰性牛舎飼育）し、それ以外の牛を区分飼育（陽性牛舎飼育）して、実施可能な牛白血病対策を開始した。

【材料と方法】

平成26年度以後、年1回の陰性牛舎における成牛のBLV全頭検査を実施した。また、陰性牛舎及び陽性牛舎におけるすべての出生子牛についてBLV検査を行った。(陰性牛舎全頭検査：平成26年度15頭、平成27年度19頭、平成28年度9月末まで（以下、平成28年度）で 19頭。陽性牛舎の出生子牛検査：194頭（平成26年度86頭、平成27年度65頭、平成28年度43頭。)陰性牛舎の出生子牛検査：26頭（平成26年度10頭、平成27年度14頭、平成28年度2頭）

【結果】

年1回の陰性牛舎の成牛のBLV検査結果は、平成26年度全頭陰性、平成27年度19頭中18頭陰性、平成28年度全頭陰性であり、陰性牛舎の成牛における陽性牛摘発頭数は、平成26年度～平成28年度の期間で1頭であった。また、陽性牛舎の出生子牛のうち、BLV陽性牛と判定された子牛は、平成26年度～平成28年度の期間で30頭であり、BLV陰性牛は同期間内で164頭であった。一方、同時期の陰性牛舎の出生子牛は26頭であり、その全頭がBLV陰性であった。その結果、陽性牛舎から陰性牛舎に移動した子牛は164頭（164/194＝84.5%）であり、陰性牛舎で生まれた子牛は28頭全部が陰性牛舎で飼育され続けた。また、BLV陰性により育成牛として保留した頭数は平成26年4月～平成28年度までで10頭であった。

【まとめ・考察】

検査体制の確立や区分飼育により、徐々にではあるが陰性牛舎の頭数規模の拡大を実現している。しかしながら、BLV陽性でも繁殖成績や系統の良い雌牛は淘汰しにくく、経営の面から考えても、すぐに清浄化することは厳しいことから、BLV清浄化対策を積極的に実施している農場に対するBLV陰性牛保留（導入）助成が望まれる。